

平成 21 年 5 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18500520  
 研究課題名（和文） 問題解決型学習法を主体とした思春期健康支援プログラムの開発  
 研究課題名（英文） Development of Adolescent Health Promotion Program used Problem Solving Learning  
 研究代表者  
 村井 文江（MURAI FUMIE）  
 筑波大学・大学院人間総合科学研究科・准教授  
 研究者番号：40229943

## 研究成果の概要：

思春期にある人たちが、自分の性行動をコントロールして健康に過ごしていくことができることを目標とした健康支援プログラムの開発を目的とした。A市との思春期保健事業と連携し高等学校において実施した。今回のプログラムとして、シナリオ（問題解決型学習）を用いたピア教育を計画し、講義のみ授業と比較をした。ピア教育に参加した対象の8割以上が問題解決思考ができたことが示唆された。しかし、安全に性行動をするための自信をあげる効果は、どちらのプログラムも確認されなかった。また、知識の定着は、ピア教育を取り入れた形式よりも講義形式のほうが効果がある可能性が示された。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,100,000	0	1,100,000
2007年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	720,000	4,220,000

研究分野：母性看護学・助産学

科研費の分科・細目：応用健康科学

キーワード：ヘルスプロモーション、性教育、思春期、ピア教育、親支援、地域連携

## 1. 研究開始当初の背景

思春期における健康増進（ヘルスプロモーション）の重要性は認識されているが、これらに関する研究は決して多くない。その理由として、思春期は、二次性徴の時期でもあり性、喫煙、飲酒、薬物などの健康リスク問題に関する興味・関心は高いが、罹患率も低く健康に対する興味関心が低いことが挙げられる。

一方、思春期における性行動、喫煙、飲酒、薬物などの健康リスク行動については、多くの研究および実践がなされている。「健やか親子21」においても、思春期の健康課題として自殺、妊娠、性感染症、喫煙、飲酒、薬物等に取り組んでいるが、2005年の中間報告では、具体的目標値にはほど遠く、現状維持がせいぜいであり改善傾向は認められていない状況にある。

状況が改善しない、理由の1つとしては、教育方法の問題が考えられる。講義形式が多いため、一時的に知識を持つことはできるが自分のこととして捉え難く知識が活用されにくい状況がある。また、当事者である思春期にある人たちの関心に一致していない現状もある。

このような状況の中で、性教育を中心にピアエデュケーションやピアカウンセリングの方法を用いた双方向性の教育が普及してきている。特に、「健やか親子 21」が施行されてからは、多くの市町村において、思春期における健康教育への具体的取り組みとしてピアエデュケーションが取り入れられている。しかしながら、その成果については十分な評価がされてきていない。

一方、医学・看護学教育の中では、問題解決型学習法（PBL）が注目されている。問題解決型学習法（PBL）は、ピアエデュケーションに関する研究とは異なり、多くの評価がなされおり、成績の向上、総合的なもの見方、主体的学習態度、対人関係技能の発達、などが認められるとされている。

以上の状況を踏まえ、自分で自分の健康をコントロールしていく健康増進（ヘルスプロモーション）の視点から、思春期に留まらず成人期以降の健康増進行動にも繋がる健康支援教育プログラムを開発が必要と考える。問題解決型学習法（PBL）の手法で対象が自分自身の健康について考え問題を明確化し、ピアエデュケーションの手法で問題についての理解・共感をし、対象をエンパワーしながら問題解決していくことを目指す健康教育プログラムの作成が期待できる。

## 2. 研究の目的

### (1) 研究当初における目的

健康増進（ヘルスプロモーション）の視座から、成人期においても自ら健康をコントロールし増進する行動が実行できることを目標にした思春期に対する健康支援教育プログラムを開発する。

### (2) 目的の修正

①修正理由：研究対象の高校生の募集が、高校単位では難しかったため、市または保健所単位に切り替えた。県を通じた応募の結果、A市の思春期保健事業をフィールドとして研究を展開することとなった。A市では、従来から、幼児期から思春期までの一貫した性教育をキャッチコピーとして思春期保健事業を展開してきていた。したがって、本研究で開発する健康支援教育プログラムは、性教育に焦点をあてたものと修正した。

### ②修正した目的

健康増進（ヘルスプロモーション）の視座から、思春期にある人たち対象に、自分たちの性行動をコントロールできることを目標に

した性教育に関する健康支援教育プログラムを開発する。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究フィールドの選択

高等学校の養護教諭に相談した結果、学校単位での対応が難しいことがわかり、県を通して、フィールドを探した。研究計画を提示し、研究との連携ということで応募を行った。A市の思春期保健事業と連携し、研究を実行することとした。

### (2) ピアとなる大学生の養成

既にピア養成講座を受講している学生をコアとして、希望者を募った。学習会と今回の研究対象以外の学校における実践を通して、養成を行った。

### (3) 現状分析

学校および保護者に対して現状のプログラムに関する質問紙調査を実施した。学校に対しては、A市が実施している性教育プログラムへの参加理由、学外者が学内で講義することについてメリット・デメリット、要望などを、保護者へは学校で実施している性教育への要望などについて自由記述を求めた。回答については、内容分析し件数を集計した。

### (4) プログラム開発

高校生を対象としたプログラムを検討した。市の思春期事業に対する方針と学校側からの要望を踏まえ、研究者が提案し、市および学校の担当者と相談した。テーマは妊娠および性感染症予防を考えた性行動の選択とした。新しいプログラムの内容は、知識提供とピア教育による自分の問題として捉え解決していく部分で構成した。ピア教育による部分は、他校で評価を踏まえ、性の問題を抱えた高校生を主人公とするシナリオを作成し、その状況にどのように対応していくかをグループで考えていくものとした。

### (5) プログラム実施・評価

高校に対して、研究協力を依頼した。プログラムに対する学校側に時間確保の状況から、ピア教育実施校と非実施校（講演のみ）に分類し、実施前後で生徒に質問紙調査を実施し、知識、行動に対する自信、等を評価した。

### (6) 倫理的配慮

生徒、保護者、学校へは、研究協力はそれぞれの自由意思に基づくものであること、参加しないことで不利益がないことを説明し保障した。学校のプログラム参加は、途中で辞めることができることを保障したうえで、それぞれの質問紙については、質問紙への回答をもって研究への参加に同意したものとすることを記述した。質問紙は無記名とし、データはコード化して扱い、回答者が特定できないようにすることを保障した。なお、研究結果を学会等で発表・報告することについて

ても説明をした。研究における全てのデータは研究者が責任をもって厳重に管理するとともに、研究終了後には破棄することを約束した。

これらの研究は、筑波大学大学院人間総合科学研究科倫理委員会の承認を得て実施した。

#### 4. 研究成果

ここでは、A市の性教育に関連した現状分析と高校生におけるプログラム実施前後の比較について報告する。

##### (1) 現状分析

##### ① 学校から評価

A市内 27 校に質問紙を配布し、21 校 (77.8%) から回答が得られた。以下、21 校からの結果について示す (表 1～8)。

市の思春期事業に参加したことのある学校は、17 校 (80.9%) であった。参加理由としては、外部講師の専門性や性教育授業の充実、性教育への関心の高まりなどが挙げられた。一方、不参加の理由としては、授業内容が、学校の方針や児童・生徒の状況に即してないことに加え、日程がとれないなどが挙げられた。また、これらの内容は、学校としての長所および短所、市の事業であることの長所および短所でも挙げられていた。性教育の普及、専門的知識の定着という点が期待される一方で、児童や生徒の状況に即してない内容があったことが明らかになった。

これらを踏まえての学校側の要望としては、命の大切さ、人間としての生き方の等を教えてほしいなど、具体的な内容も記載されていた。性教育に関する市への期待も学校としては持っており、連携しつつ方法および内容を洗練させていく必要性が示された。

表 1 思春期保健事業への参加状況

	学校数 (%)
継続的に参加している*	13 (61.9)
以前は参加したことがあるが今はしていない	4 (19.0)
参加したことがない	3 (14.3)
不明	1 (4.8)

21

\*開始年度はさまざまである

表 2 参加の理由

	(複数回答)	件数
外部講師による専門性を生かした内容を期待するため	8	
市の企画だから	2	
充実した授業をしたい	2	
性教育の必要性を感じて	3	
担当者の希望	1	
児童、保護者、教師が性について正しく理解できる	2	
児童、保護者、教師の性教育への関心が高まる	1	

19

表 3 不参加の理由

	(複数回答)	件数
内容があわない(学習指導要領や学校の方針と)	3	
時間の確保ができない	2	
日程があわなかった	2	
学年からの希望がなかった	1	
担任の負担増になるため	1	

9

表 4 学校としての長所

	(複数回答)	件数
専門的な立場から指導してもらえる	8	
児童や生徒が興味関心を持って集中して聞ける	6	
専門的な知識が高まる	3	
統一した指導ができる	3	
児童や保護者の関心が高まった(または、高まる)	3	
資料等を準備してもらえる	3	
外部講師による教育の推進になった	2	
保護者も参加できる	1	

29

表 5 学校としての短所

	(複数回答)	件数
打ち合わせが十分できない	7	
内容が生徒の実態に合っていない	5	
不適切な内容や内容の偏りがあった	2	
日程の調整が難しい	1	
スムーズに授業を進められなかった	1	
学年での講演のため理解が深まらない生徒がいる	1	

17

表 6 市の事業であることの長所

	(複数回答)	件数
市内、同一歩調で指導ができ、知識が平均化できる	8	
講師を探して依頼する手続きをしてもらえる	4	
専門的な視点から教育することで児童・生徒の興味・関心を高められる	2	
児童や保護者の意識を高める機会になる	3	
性教育が実施しやすい	2	
学校だけでなく市全体として取り組める	2	
大学と連携が図れてよい	1	
わかりやすい資料を準備してもらえる	1	

23

表 7 市の事業であることの短所

	(複数回答)	件数
児童・生徒の実態に合わない	4	
学校内での指導との関連が図りづらい	3	
実施しない学校とする学校があることで格差生じる	2	
市の事業でありながら外部講師の占める割合が大きい	2	
性教育全般ではなく一部分である	1	
親の性教育に対する考え方に差がある	1	
日程調整が大変	1	

14

表 8 要望

(複数回答)	件数
命の大切さ、人間としての生き方を教えてほしい	3
学校の指導内容の一貫として実施してほしい	3
基本となる指導案があると取り組みやすい	2
発達段階に応じたわかりやすい指導内容	2
毎年、内容を確認してほしい	2
他学年でも実施してほしい	1
保護者の質問等にも答えてもらいたい	1
市でコーディネータとしての役割をとってほしい	1
地区ごとに年度をきめて割り当てて取り組んでほしい	1
専門家の講師にお願いしたい	1
継続してほしい	1
	18

②学校での性教育に対する保護者の要望と家庭での性教育

学校を通じて、保護者が、性教育についてどのように考えているか質問紙調査を実施した。294部配布し245部(83.3%)の回収があり、そのうち、全くの無回答であった3部を除いた242部について分析をおこなった。ここでは、学校でどのような性教育を実施してほしいかということと、家庭でどのように性教育を実施しているかについての結果を報告する。

表9に示すように、保護者は、学校において、二次性徴を中心とした体や心の変化などの知識を適切に教えて欲しいと考えていた。また、命の大切さ等の道徳的な内容も期待がされていた。一方で、性教育をすることによって、性に対して過剰な興味をもつのではという懸念もあり、そのようにならないようにしてほしいとの要望があった。

家庭での実施している、またはしたい性教育としては、学校への要望とは異なり、“発達や子どもの目線に合わせて教えた”、“質問や相談に応じていけるようにしたい”、“自然な形で教えた”というように、内容ではなく、親がどのように子どもに接していくという内容が多く挙げられた。一方で、“どのように教えたらよいかわからない・考えていない”という回答も少なくなく、試行錯誤しつつも子どもと向き合っている姿が伺えた。

学校への要望を家庭での性教育の内容の違いから、保護者は、学校での性教育に期待を持っていることが明らかになった。具体的なには、学校に対して、性に関する正しい知識や考え方の教育を期待し、家庭では、子どもの様子をみながら少しずつ話していきたいと考えていることが示された。

表 9 学校での性教育してほしいこと

(複数回答)	件数
二次性徴(体と心の変化)について	125
命の大切さ・尊さ	33
生命誕生の仕組みについて正しい知識(妊娠・出産)	26
発達段階にあわせた教育内容で、繰り返しを	24
過剰に興味をもたないような内容にしてほしい	15
二次性徴への対応	9
性行為感染症	9
相手を思いやる気持ち	6
好きになるということ・男女交際	5
二次性徴の大切さ・体の大切さ	5
性行為について	4
あかちゃん誕生の素晴らしさ(命の素晴らしさ)	3
自分を大切にするという意味	3
男の子と女の子では、役割それぞれあるようなこと	2
どのように自分自身が大切にされているか	2
避妊の仕方について	2
性に対する責任・モラル	2
親と子の思い	1
性的虐待防止のために	1
	277

表 10 家庭でする性教育

(複数回答)	件数
発達や子どもの目線に合わせて教えた	64
質問や相談に応じていけるようにしたい	59
自然な形で教えた	37
どのように教えたらよいかわからない・考えていない	32
二次性徴について	26
ありのままを教えた	16
恥ずかしからず話をしてほしい	13
女の子は母親、男の子は父親が教育してほしい	13
いのちの尊さ・大切さについて話してほしい	11
家族で何でも話合えるようにしてほしい	10
自分を自分の体を大切にすること	8
自分はどうして生まれてきたか・存在するのか	7
相手を大切にすること	4
性行為が大切なものであること	3
学校で学んでほしいようにしてほしいと思います	3
事件等の予防について	2
正しい判断をもつ大人へと成長させてほしい	2
子どもと一緒に考えてほしい	2
成長し、中でも人との関わり方・男女交際	2
親と話しづらい時話ができるような友人をつくっておくように	1
避妊について	1
常識を教えた	1
	317

③プログラム評価

高等学校3校にてプログラム評価を実施した。ピア教育を実施した学校は2校(380名)、講義のみを実施した学校は1校(266名)であった。これらの生徒と対象に授業前後において、安全な性行動に関する知識、性行動に関する自信等について比較検討をおこなった。質問紙の回収は、ピア教育実施校において、授業前326、授業後358、講義のみの学校においては、授業前252、授業後261であった。

ピア教育はシナリオを用いて、自分たちの性行動について考えていく形式とした。シナリオにおける3人の登場人物に対して、それぞれの立場で問題を考えられたかと問い、シ

ナリオについてのコミットメント状況を把握した。3人の登場人物に対して、86.4～94.7%が立場で考えることができたと回答しており、問題解決をする思考をしていたことが示唆された。

安全な性行動に関する知識は、妊娠および性感染症に予防に関する教科書的な基本内容10項目について質問し、正解を1点として得点を計算した。ピア教育の実施群と講義のみ群での授業前後の知識得点結果は、表11に示すとおりである。どちらの群においても授業の知識得点の増加が認められた。授業前の知識得点は、ピア教育実施群が講義のみ群に比べ有意に高得点 ( $p < 0.001$ ) であるのに対して、授業後は、ピア教育実施群が講義のみ群に比べ有意に低得点 ( $p < 0.001$ ) であり、講義群がピア教育実施群より得点の上昇がよく、しかも授業に優位に高得点であった。したがって、知識の定着をはかっていくには、問題解決思考を活用したピア教育より講義形式の授業のほうが効果的である可能性が示唆された。

表 11 安全な性行動に関する知識

	授業前	授業後	
ピア教育実施	7.6±1.6	8.4±1.3	$p < 0.001$
講義のみ	6.9±1.4	8.8±1.3	$p < 0.001$

性行動に関する自信は、性感染症にかからない自信、妊娠しない自信、コンドームを使用する自信を尋ねた。結果は、表12～14に示すとおりである。ピア教育実施群および講義のみ群ともに、自信あり群が、授業に若干増加するものの、有意差は認められなかった。今回実施した問題解決思考を活用したピア教育および講義形式の授業は、性行動に関する自信を高める教育としては効果が示唆されなかった。

表 12 性感染症にかからない自信

		自信あり	自信なし	
ピア教育実施	前	93(28.6%)	232(71.4%)	$\chi^2 = 0.177$ $p = 0.737$
	後	108(30.1%)	251(69.9%)	
講義のみ	前	83(31.8%)	178(68.2%)	$\chi^2 = 0.191$ $p = 0.662$
	後	90(33.6%)	178(66.4%)	

表 13 妊娠しない自信

		自信あり	自信なし	
ピア教育実施	前	98(30.1%)	228(69.9%)	$\chi^2 = 0.084$ $p = 0.772$
	後	104(29.1%)	254(70.9%)	
講義のみ	前	73(28.8%)	185(71.7%)	$\chi^2 = 1.079$ $p = 0.299$
	後	87(32.5%)	181(67.5%)	

表 14 コンドームを使用する自信

		自信あり	自信なし	
ピア教育実施	前	192(60.0%)	128(40.0%)	$\chi^2 = 1.908$ $p = 0.167$
	後	230(65.2%)	123(34.8%)	
講義のみ	前	139(55.2%)	112(44.4%)	$\chi^2 = 2.886$ $p = 0.236$
	後	160(61.3%)	101(38.7%)	

## (2) 限界と今後の課題

今回のプログラムは、A市との連携で学校の教育課程の中で実施したため、プログラム実施上で、時間、回数、クラスの数などの制約が生じ、制御できていない部分がある。したがって、プログラム評価研究としては不十分な成果である。プログラム評価をする上では、将来の実施可能性を踏まえたうえ、状況を制御し実施することが必要である。さらに本プログラムの最終目標は、新春期において安全な性行動をとれるということであるため、性意識や性行動（リスク行動の結果も含む）について数年後までの対象を追跡していくことが必要である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

村井文江：日本における思春期健康教育の質の確保について 10年間(1997年～2006年)の文献検討より、思春期学、26(1)、118-119. 2008. (査読有)

〔学会発表〕(計1件)

村井文江：日本における思春期健康教育の質の確保について 10年間(1997年～2006年)の文献検討より、第26回日本思春期学会(東京)、平成19年8月31日

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

村井 文江 (MURAI FUMIE)

筑波大学・大学院人間総合科学研究科・准教授

研究者番号：40229943

### (2) 研究分担者

高田 ゆり子 (TAKATA YURIKO)

筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授  
研究者番号：90336660

安梅勅江 (ANME TOKIE)

筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授  
研究者番号：20201907

坂田 由美子 (SAKATA YUMIKO)  
筑波大学・大学院人間総合科学研究科・教授  
研究者番号：30347372

樋之津 敦子 (HINOTSU ATSUKO)  
札幌市立大学・看護学部・教授  
研究者番号：90230656